

(雛型) 博士学位論文内容の要旨

氏 名	四條 真也
学 位 の 種 類	博士 (社会人類学)
学 位 記 番 号	人博 第 99 号
学位授与の日付	平成 29 年 2 月 22 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題名	先住ハワイ社会におけるエスニック・プライドをめぐる 人類学的研究
論文審査委員	主査 教授 綾部 真雄 委員 准教授 深山 直子 委員 名誉教授 高桑 史子

【論文の内容の要旨】

論文要旨

論文タイトル

(仮) 先住ハワイ社会におけるエスニック・プライドをめぐる人類学的研究

四條真也

本論の目的は、社会人類学的・文化人類学的調査によって得られたデータをもとに、特にオアフ島西岸域ワイアナエ地区における先住ハワイ人専用の居住区「ハワイアン・ホームステッド (Hawaiian Homestead)」と、その周辺域において浮かび上がってくる先住ハワイ人社会の現代性をプライド (pride) 概念を出発点として考察することにある。

序論では、本論の基軸である「プライド」概念について、社会的および学問的系譜を整理した。1980年代になり機運が高まった先住ハワイ社会における「プライド」は、1960年代にアメリカ本土で活性化する公民権運動後に広がった「エスニック (レイス)・プライド運動」がその淵源であるといえる。

アメリカ国内の諸民族集団、なかでも「マイノリティ」と呼ばれる民族集団が、アメリカ国家による文化的承認を得ることを意図して発生したエスニック・プライド運動では、それぞれ民族の目的が分散した。そのために、1950年から1960年代にかけての公民権運動のように諸民族集団がまとまる形ではなく、運動自体が中心化せずにアメリカ全土に拡大した。とりわけ、規模の大きなエスニック・プライド運動を展開したのがアフリカ系アメリカ人と先住アメリカ人のグループであった。

また序章ではハワイ研究においては、長く「外部者」とくに「ハオレ (白人)」による記述が主流を占めてきた。しかし、1980年代に伝統文化復興運動「ハワイアン・ルネサンス」が盛り上がりを見せると、白人研究者の記述に対する批判の声がネイティブ研究者から起こるようになり、以後はハワイ研究、とくに歴史解釈をめぐる議論の場などでは、発言の主体がネイティブ研究者へと移行することになる。

第1章では、現在のハワイ社会の概要にかんして整理をした。とくに、多民族社会であるハワイは、個人が複数の民族出自を有することが珍しくなく、民族性を一つに限定する際には状況や社会環境が影響するといえる。本論の舞台であるワイアナエ地区にかんして、1920年以降にハワイ人専用住宅であるハワイアン・ホームステッドの建設がはじまり、現在では州で最大規模のホームステッドを有する地区であることを示した。

第2章では、ジェームズ・クックが到達する以前のハワイ社会について、神話とカプ (kapu 禁忌体系) を起点に、基本構造についてまとめた。近代ハワイ社会で、神話、とりわけ神々の時代にさかのぼる王族の系譜を伝える『クムリポ』は、アメリカの支配が強まる中で王によって積極的に公開されてきた。伝統的なハワイ社会を理解するために重要な概念の一

つがカブである。男女の供食の禁止や特定首長の前で跪くことなど、生活全般に及ぶ様々な禁忌を規定したカブ・システムは、宗教体系および政治体系としても作用していた。しかし、伝統的な暦や儀礼には、カブが解禁される期間があり、その期間にはカブがない状態であるノア（noa）となり、均質的な社会空間が現れるのである。伝統的社会では、カブとノアの「緩急」によって厳格な階層社会が維持されていたとかんがえることができる。

第3章では、西洋との接触以降のハワイの歴史について、伝統的な土地制度と、近代土地制度が導入される経緯を中心に記述をした。伝統的な土地制度においては、土地は個人所有ではなく、基本的には管理を任された首長階級の者が統治をした。しかし、ずさんな管理や住民への配慮を欠いた統治を行った場合には、領内の住民は新たな管理者を要求することができた。ハワイの西洋化が始まると、まずは土地の個人所有という概念が持ち込まれる。キリスト教への改宗など次第に西洋化した王朝も、ついにはハワイにおける土地の個人所有を認めるよう政策を転換せざるを得ない状況となり、ハワイ内の多くの土地を白人層によって占められ、先住ハワイ人は代々の土地を追われ都市に流入することになる。都市に流入した先住ハワイ人は、非衛生的な環境下での生活を強いられ、ハワイ文化はさらに縮小する危機に瀕するのであった。しかし、王国後期には、カラーカウア王など伝統文化を公の場に取り戻す機運が生まれ、一時的ではあるが先住ハワイ人文化が自身の文化を取り戻した時代でもあった。

第4章は、現代ハワイ社会にみられる地理的な二重構造についての議論である。ハワイ社会で用いられる「タウン」と「カントリー」というふたつの概念は、ハワイにおいて都市地域と田舎地域のそれぞれを呼ぶ際の名称である。「タウン」と「カントリー」の境界についての説明は個々人で異なるが、大まか一致するのは、境界は開発の程度と住民の経済的基盤が指標になっていることが分かった。また「カントリー」にかんしては、近年ではプランテーション時代の名残や歴史背景を重視し、郷愁を求める風潮を確認することができた。ハワイ社会において、かつて「カントリー」は都市地域に劣る社会経済的環境であったのに対して、現在では「カントリー」であることにプライドをもつ傾向があることがわかった。

第5章では、現代ハワイ社会の家族の形が、西洋化以降に導入された血の概念によって、いかに変容したかを、インタビュー資料を中心に考察を試みた。現代ハワイ社会における血の割合（blood quantum）という概念は、ハワイアン・ホームステッドの申し込みの際に定められた規則（50%以上の先住ハワイ人の血）をもとにしており、現代ではホームステッドの場を離れて言及されることも多い。そもそも、血縁ではなく関係性により親族体系が構築されていた先住ハワイ人の親族関係において、西洋的な親族システムの導入は、家族新たな形に作り変える切っ掛けになった。さらに、血の割合の規則は、先住ハワイ人を分断する規則でもあった。現代の先住ハワイ社会内部で問題となる、経済社会の一つの要因として血による区別が影響していると考えることができる。

第6章では、養子の伝統と血の割合の相関について分析を行った。ハワイを含むオセアニア地域では、養取慣行が一般的であった。しかし、ハワイ社会において、親族体系にお

ける血という概念、そしてキリスト教的家族像の涵養は、結果養子に対して否定的な社会環境を醸成することになる。ハワイ語やフラ同様に、伝統的な養子縁組「ハーナイ」(hānai)もアメリカ化のなかで停滞するものの、1970年代以降にハワイ文化が回復しはじめると、ハーナイも伝統的価値観と関連付けて行われるようになる。

第7章では、ワイアナエ地区が抱える社会問題のうち、貧困問題に注目して議論を行った。昨今ハワイ社会で増加傾向にあるホームレスは、ワイアナエ地区でとくに深刻な状況にある。ハワイで貧困層を生む要因として、景気の低迷や観光による物価の上昇以外に、血の割合などの先住ハワイ人政策による格差問題を指摘する声もある。

第8章では、ハワイの伝統文化の中で、重要な位置を占めるフラにおける現代性を、ワイアナエでの事例から分析を行った。西洋との接触以降、フラにおいては女性の踊り手が重宝されたために、もともとはフラにかんして重要な役割を果たしていた男性は、フラを踊る場を失ってしまう。ハワイアン・ルネサンス以降、男性によるフラの回復も試みられ、現在では男性フラも一定の認知をもってハワイ社会に受け入れられている。しかし、「カントリー」であるワイアナエ地区では、未だに男性がフラを踊ることに関する「偏見」が根強い。そうした偏見を払拭するべく、ワイアナエ地区で開かれるフラ教室の男性クラスでは、踊りに関して、たとえば腰を必要以上に揺らさない、手の動きを柔らかくしないなどの男性性を強調する指導が見受けられる。第8章では、こうした、男性（あるいは男性性）を伝統文化に再移入する試みが、フラのみならず多くのハワイ文化を継承する場で行われていることが明らかになった。

第9章では、ワイアナエ地区で観光用のイルカ見学ツアーで参与観察を行い、ツアーの中で伝統文化表彰される背景を、ツアー船を操業する船長ハリーの語りを通して記述した。最近では、ボートの騒音などの人間の営みが、イルカの生活環境を脅かし、生態系に悪影響を与えているとする主張もあるなかで、海を熟知したハリーはツアーを行うにあたり、先住ハワイ人の伝統的価値観を組み入れ、参加者に説明をする。ハリー自身も、イルカへの感謝を忘れない。観光やエンジン付きのボートという西洋文明を利用しながらも、伝統的な意識をもってツアーを行うことで、自然との調和を保とうとする先住ハワイ人の現代性を第9章で記述した。

第10章は、子供の貧困問題や未成年非行、機能不全家庭問題の解決の糸口として取り組まれている、協同農園活動についての記述である。ワイアナエ地区にあるふたつの農園について行った参与観察から、それぞれの農園は現在では地域住民をつなぐことを目的のひとつに掲げ、活動を行っていることを確認した。また、活動に際しては、アロハ・アーイナ(aloha 'āina: 大地を愛せよ) やオハナ('ohana ハワイ的拡大家族) など伝統的な価値観を用い、地域住民同士の紐帯や自然の重要性を学ぶ機会を設けている。そうした経験は、やがて先住ハワイ人以外の子供たちも地域に対する愛着を持つことに繋がり、ワイアナエ地区全体の社会活性を目指す取り組みであるといえる。